

メキシコ日系社会におけるトランスナショナル・リレーションズ —南北アメリカおよび日本との人のつながり、過去・現在・未来—

浅香 幸枝

はじめに

トランスナショナル・リレーションズ（国境を越えた人のつながり）は、21世紀の世界秩序形成の中で主要な課題である。アメリカ歴史学会会長を務めた入江昭ハーバード大学名誉教授は、日本国際政治学会のニューズレターの中で「グローバル化は、トランスナショナル化でもある。明確な国境を持つ主権国家間のやり取りが国際関係だとすれば、国境を越えたつながりが拡大し、深まっていく過程は人間同士、市民社会同士のからみあいである。そのような現象を把握するためには、国際関係とは別の概念や方法論が必要となる。」と過去20年ほどの学会の研究をまとめている（入江2016）。

メキシコ日系社会をこの視点から眺めた時、望ましい世界秩序への貢献の可能性が観察できる。1897年の榎本移民を嚆矢とするメキシコ日系社会は、1981年に南北アメリカの日系人の横のつながりから生まれたパンアメリカン二世（後に日系）大会の第一回目の開催者となった。また、2011年にはカンクンで第16回大会を開催し、15年ドミニカ共和国サントドミンゴでの第18回大会が開催された時は、まだ年月の浅いドミニカ支部を支援している（写真1）。地政学上の位置付けからメキシコ日系社会は南北アメリカの日系社会をつなぐ要となっている。

本稿では、このような視点から、パンアメリカン日系大会とメキシコ、榎本移民と日本企業の進出、教育を通じた異文化理解と共生について考察を進める。このような活動には、政府や企業、教育組織だけではな

く、そこに参加する一人ひとりが重要なアクターであり、変革者であり、世界秩序形成者となるからである。この論考を読んでくださる方がまさにその主役なのだというを紹介する。

パンアメリカン日系大会とメキシコ

南北アメリカ13カ国に支部のあるパンアメリカン日系協会（Asociación Panamericana Nikkei）は、日本をルーツに持つ二世や三世そして新一世が集う協会である（詳細は浅香『地球時代の日本の多文化共生政策—南北アメリカ日系社会との連携を目指して—』2013年 明石書店）。1981年以来、2年に一度南北アメリカの一国で世界大会が開催される。会場は5つ星のホテルか日系団体の会場が使用される。参加規模は約500名であり、各国の名士と位置付けられる人々が集まり、共通のアイデンティティ Nikkei を維持しつつ、日本から自分たちが受け継いだ技術や文化を自分の国で役立て貢献しようとしている。日本人といっても多様であるように、日系人も同様に多様である。ここに集う人たちは親日傾向の強い人たちである。また、日本の繁栄とともに自分の成功も関連していると認識している人が多い。さらに現地の事情に詳しく、日系人以外の有力な友人を持っていることが多いので、国際情勢の分析眼はとても鋭い。

メキシコでのパンアメリカン日系大会の開催は81年の第1回大会、97年のメキシコ移住100周年に行った第9回大会、2011年の第16回カンクン大会と3回開催された。80年代以来パンアメリカン日系大会は必ず英語の通訳がついていたが、2009年のウルグアイ大会以降は英語の通訳はあってもスペイン語が主流となっている。現在のパンアメリカン日系協会会長はペルー出身の米国人である。第3回大会から、米国、カナダ、メキシコ、ペルー、コロンビア、ウルグアイ、アルゼンチン、ブラジルの8カ国の国旗とディスカバリー号の打ち上げの写真を大会では飾っていたが、現在では大会旗を開催国に置くようになった（写真2）。6つの国旗は米国の鬼塚エリソン宇宙飛行士が最初の宇宙飛行で胸のポケットに入れて宇宙に持っていったものである。宇宙から帰還した8つの国旗に新たに加わった



パンアメリカン日系協会の代表者たち（筆者撮影）



パンアメリカン日系協会の大会旗（筆者撮影）

パラグアイ、ボリビア、チリ、ベネズエラ、ドミニカ共和国の5カ国が加入して合計13カ国となっている。このように、日系人を横につなぐネットワークがパンアメリカン日系協会の特徴となっている。

榎本移民と日本企業の進出

1897年、メキシコ、チアパスに榎本移民が入植した。その時の現地監督は草鹿砥寅二農学士であり、日本の農村の疲弊を救うために、同郷の愛知県三河の農民を中心に募集して、コーヒー栽培を目指した（浅香1986；1997）。この植民自体は失敗に終わったが、現地に残った人々が学校を作り、また医療でも貢献してメキシコと日本との友好の礎となった。最近ではこの榎本移民を漫画で描き、スペイン語で日本人移民のメキシコの国づくりでの役割を共通の歴史として伝えている（UENO y SAKUYA, 2007）。

人口約1億2,701万人のメキシコにおいて約2万人の日系人がおり、在留邦人は9,186人であり、約814社の進出企業もあり、2016年1月にはグアナファト州レオン市に在レオン日本国総領事館が新設された（外務省2016年1月20日）。愛知県三河から世界的な自動車メーカーになったトヨタ自動車もこの地域に進出し、裾野の広い産業ゆえに関連会社も出て、すでに歴史のある他のメーカーとともにメキシコ社会へ大きな変容をもたらすものとなっている。

人の移動という視点から、この現象を分析すると、現在生じているグローバル化は国と国のレベルの交流だけでなく、出身地域と出かけた地域とを直接結ぶものになっている。近年の移民研究の新動向として、県

単位でどのように世界に広がる移住先と関わっているかの研究が始まっている。このことは、ヒューマンスケールのレベルで持続可能なコミュニティを形成する動きと連動している。すなわち、進出企業には、地域と共に生活の質を上げ、地域の人々から愛される存在になることが求められている。日系移民の生き方でいうならば、「情けは人のためならず」「好かれる長者さん」を目指し、現地に根付くやり方である。

教育を通じた異文化理解と共生

1977年に、バイリンガル・バイカルチュラル教育の日墨学院が開校した。日本コースとメキシココースがあり、先進的な異文化理解教育を行ってきた。筆者の勤務する南山大学総合政策学部は2000年4月に開設され、文明の違いの分かる問題解決型の人材を育成するため、学生の一割を占める留学生とともに4年間学ぶカリキュラムになっている。アジアの学生が中心であるが、日墨学院メキシココースからも各年度1名の奨学金枠がある。まだ、一桁の卒業生数ではあるが、彼らが居ることによって、絶えずメキシコの情報や感じ方、考え方が共有されている。授業の中で、あるメキシコ人留学生が小川未明の「赤いろうそくと人魚」に惹かれますと日本語で発言した時には、日本人学生はびっくりした。また、講義ではメキシコから見た発言をしてくれるので、アジアからの留学生の意見とも比較しながら、日本人学生が多様な考え方や感じ方を学び、討論するよい機会となっている。こうした環境で育まれる友情はかけがえのない財産である。

また、帰国生徒たちの存在も多様な世界を理解するためには重要である。筆者のゼミナールに南山国際高校出身の学生も多いが、その大きな特徴は日本と自分が育った国を両方愛しており、異文化への理解力が優れていることである。さらに、海外に出ることを恐れず、自分の能力を使って、世界の役に立つ人になりたいと志向している。海外で奮闘する両親の後姿から学んだのだと考察できる。一世の両親から頑張ることを学んだパンアメリカン日系協会のリーダーたちによく似ていると感じる。

企業進出にともなって、日墨学院のような学校も作られると思うが、ぜひ日本人や日系人に限らず、メキシコ人にも門戸を開き、将来の日本とメキシコをつなぐ人材育成が行われることを望む。このような地道な活動があつてこそ、磐石な友好関係の土台が継続して築かれていくからである。企業で勤める人そしてその

家族も重要なアクターとして、これからの日本とメキシコ、さらにはその他の国々を結びつけることになる。

おわりに

以上見てきたように、国境を越えた人のつながりは、顔の見える人間同士の関係であり、日常の生活レベルから質の向上を求め、互いのコミュニティが持続可能な発展を遂げるように協力関係となることが肝要である。2015年のパンアメリカン日系大会では、誰でもできる社会貢献として、自分たちの住んでいる町を自主的に掃除して綺麗にするということが話し合われた。そのモデルになっているのが、メキシコチアパスで行われたお掃除キャンペーンで、家の掃除を一番綺麗にした人に洗濯機をプレゼントするというものだ（写真3）。貧富の差は簡単には解消しなくても、今できることとして、自分の周りから整理整頓・掃除をすれば病氣罹患率は下がるし、何より気分爽快になる。日本の景気が悪い時、掃除をすると運が良くなるという調子の雑誌広告が多かったのを思い出す。いらいら怒るより、実質的である。掃除をして清潔にするというのは、日本人には当たり前のことであるが、メキシコ日系社会がメキシコにもたらした新しい貢献のように思われる。13年のアルゼンチンでのパンアメリカン日系大会で、日系の旅行社で働いているパラグアイ出身の日系人が、日本の学校で習った掃除は仕事の段取り力がつくと指摘していた効果にも通じるのかもしれない。



メキシコチアパスでのお掃除大会で優勝者に洗濯機贈呈
（写真提供：春日カルロス氏）

（あさか さちえ 南山大学総合政策学部准教授）

引用文献

入江昭（2016）「『国際』と『政治』を乗り越えて」

JAIR Newsletter, No.146 January 2016、日本国際政治学会

浅香幸枝（2013）『地球時代の日本の多文化共生政策

—南北アメリカ日系社会との連携を目指して—』明石書店

浅香幸枝（1986）「複本移民監督 農学士草鹿砥寅二についての一考察」『国際学論集』第17号、上智大学国際関係研究所

浅香幸枝（1997）「メキシコ移住百年 愛知県とメキシコを結ぶ人々①～④」『中日新聞』夕刊1997年2月18日～21日、中日新聞社

Hisashi UENO y Konohana SAKUYA（2007）*Los samuráis de México: la verdadera historia de los primeros inmigrantes japoneses en Latinoamérica*, Artes Gráficas Panorama, S.A. de C.V.

外務省（2016）「メキシコ合衆国 基礎データ」2016年1月20日、2016年3月1日閲覧<<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/mexico/data.html>>

